

✉ ～ 1 9 4 5 ～ ✉

硫黄島からの手紙

LETTERS FROM IWO JIMA

映画で考える 「敵にも家族がいる」

対象：中学生以上

名前

年 組

1 「兵士」である前に「一人の人」

硫黄島の地下からは、戦後になって、兵士たちが家族に書いた**届かなかった手紙**が見つかりました。そこには「必ず帰る」とは書けない思いがつづられていました。

✉ 「敵」の向こうにも、家族がいる。

🔑 硫黄島の戦い

1945年2月～3月、東京から約1200km南の小さな島・硫黄島で、日本軍とアメリカ軍の激しい戦いがありました。日本軍は約2万人がほぼ全滅に近い形で戦死し、アメリカ軍にも大きな犠牲が出ました。

※実在の人物を描いていますが、一つひとつの場面には創作も含まれます。

2 「敵にも家族がいる」を考える4つの視点

■ ① 手紙に書かれた日常

家族の健康、子どもの成長、庭の野菜。ふつうの暮らしへの思い。

■ ② 敵の母の手紙

アメリカ兵の母からの手紙にも、同じような言葉が書かれていた。

■ ③ 一人の人として見る

パン屋、父親、オリンピック選手。それぞれの人生があった。

■ ④ 命令と葛藤

命を粗末にする命令に、登場人物はさまざまに悩んだ。

3 映画『硫黄島からの手紙』とは

あらすじ

1944年、硫黄島に新しい指揮官・栗林忠道中将がやってきます。栗林は地下に陣地を築き、長い戦いにそなえます。パン屋だった一兵士・西郷は、身重の妻を残して召集されました。指揮官と一兵士、立場のちがう2人の目を通して、戦場の日々が描かれます。

同じ戦いを2本の映画で

クリント・イーストウッド監督は、同じ硫黄島の戦いを、アメリカ側から『父親たちの星条旗』、日本側からこの作品の2本で描きました。アメリカ映画ですが、セリフはほとんど日本語です。

見るときの心がまえ

戦いの厳しい場面も出てきます。手紙を書く人たちが、誰のことを思っているかを想像しながら見ましょう。

4 手紙から考えるワーク

 映画を観て（またはあらすじから）、考えて書こう

① 兵士の手紙で、いちばん心に残った言葉や場面は？

② 西郷と栗林、立場はちがっても共通していた思いは？

③ アメリカ兵の母の手紙を読んだ場面で、何を感じた？

④ 戦地にいる家族に手紙を書くとしたら、何を伝えたい？

5 ふりかえり

「敵」と呼ばれる相手にも、_____がいると分かりました。これから、対立している相手を見るときは、_____を想像したいです。

 『敵』の向こうにも、家族がいる。

先生・保護者へ：『硫黄島からの手紙』は日本で映倫Gですが、戦闘による死傷、自決の場面など重い描写を含みます。本資料は中学生以上を想定しています。上映する場合は場面を選び、太平洋戦争末期の状況を事前に補ってください。個々の場面には創作が含まれます。

© 2026 FilmEdu AI / この教材はAIを活用して作成しています。内容に誤りを含む場合があります。解説文はすべてオリジナルで、ポスター・場面写真は使用していません。作品の著作権は各権利者に帰属します。授業での上映には適切な権利処理が必要になる場合があります。